

第51回Zoom三水会報告

日時：2025年10月15日（水）16時～17時

テーマ：ベルグソン哲学の現代への延長

話者並びに司会：野口幹夫

参加者（敬称略） 中村範子 波治裕実 丸山茂樹 野崎俊一 岩垂弘 富沢賢治 小関栄

野口幹夫 計9名

会の内容： 哲学者ベルグソンの言い残した言葉「人類はまだ進歩の途上にある。精神科学の進歩とともに次なる進化がある、又哲学もその時点の科学の進歩にそって成長しなければならない。」との示唆に沿って、ベルグソン亡き後の精神科学スピリチュアリズムの大展開と、主に宇宙科学と量子物理学の分野で遂げた発展を見ていく。そしてやがてダークマターの科学が進歩するとき、人間の魂の理解が科学的にもすすむとき、その進歩は訪れるだろう。

質疑討議： 死後の世界のこと魂の存在は古くからの内に秘めた課題なので、ここに機会を得たと皆様の活発なお話が合った。詳しくは録画で見てください。

資料： 次ページ：PDF ベルグソン哲学の現代への延長 NewV

録画資料： <https://youtu.be/8Yd09anB37c>

ベルグソン哲学の現代までの 延長

量子科学と宇宙観測による現代科学の成果と
ベルグソンが期待した精神科学の融合進化

2025-10-15 三水会 野口幹夫

1、序章 ベルグソン哲学の遺言

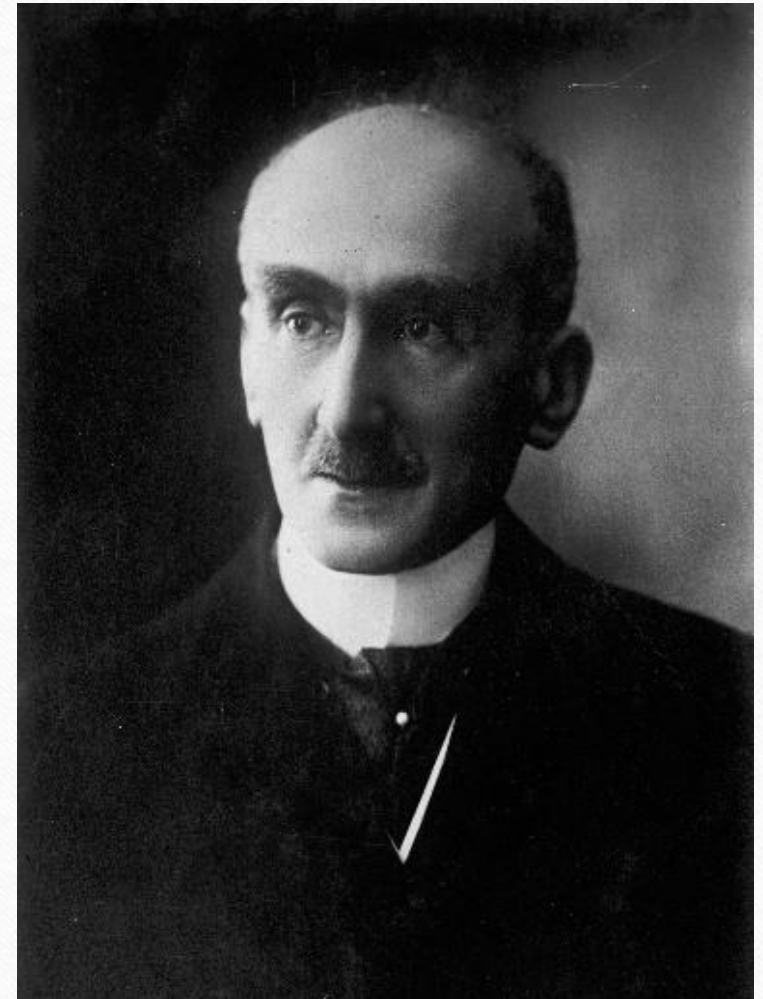
私が多くをまなんだ20世紀初めのフランスの哲学者アンリ・ベルグソンは、宇宙創成の時から始まったエランビタール（いのちの波）は今も広がりつつあり、そのウエイブフロントに人間がいる。

人間はまだ**進化の途上**にある。

精神の科学が進化するとき

人類も新たな進化を始める。

哲学もその時点に到達した科学とともに進化しなければならぬと述べた。



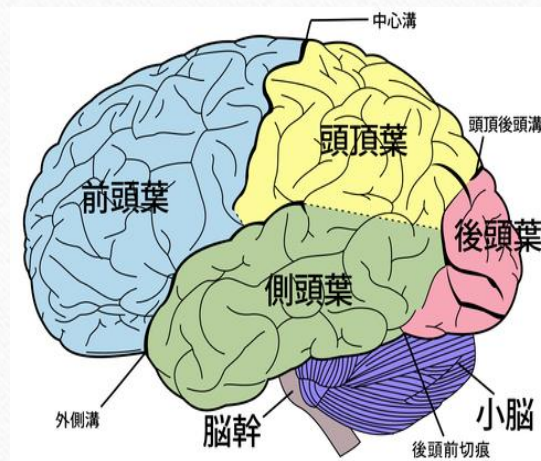
その説に沿って、ベルグソン亡き後の
諸科学特に宇宙科学と量子物理学の進歩と
大きな進歩を遂げた精神科学の成果を追い、
人類の次なる進化が近づいたかどうか検証しようとする
のがこのレポートである。

2, 科学の進歩とその限界 人体の探求 精神は存在せず

ベルグソンは、「科学」の手法は生命の解明には適さないと

「科学」の限界を説いていた。科学の対象は、繰り返す現象であり、繰り返しのない生命現象は、対象とはなりえない。またその科学の手法は、対象を徹底的に分解してその要素を解析する方法を取るが、生命現象は分解すると命が消滅するので、生命の追求には不適であるとのべた。

その後の科学の進歩でも、その説の通りで、
脳の詳細解析を進めた脳科学の結論は
精神の存在、長期記憶器官の存在を発見できないために、それは存在せず、あるように見えるのは錯覚であると結論付けている。



この写真の作成者 不明な作成者は [CC BY-SA-NC](#) のライセンスを許諾されています

NHKの8年におたる長期番組
NHKスペシャル「タモリ×山中伸
弥が“命の神秘”に迫る」は2025-6
月に終了した力作であった。

IPS細胞の発見実用化でノーベル
賞を受けた山中伸弥教授が紹介す
る最新の細胞研究の成果を踏まえ
たいのちの研究の最先端を紹介す
る番組であった。



「いのちの最小単位である人間細胞の中身」のCG映像化で、単なる蛋白質物質であるにも関わらず、まるで意思があるかのように歩き、合体し、協力し合う“細胞内キャラクター”たちの存在と活躍の研究の最新情報を教えてくれた。

そしてその最終回の結論は、いのちとは何かを求めての研究は新段階にまで進んで多くのことが判明したが、そのいのちの究極の姿は、多くのことが見えれば見えるほど、新たな謎は深まるばかりで、今もその先が見えない、「いのちとは神秘の存在である」であった。

ベルグソンは、いのちの本質を追求する方法は、このように科学手法ではなく、別な方法で探求できるとした。

いのちにかかわる不思議と思われる事象を、その発生の確かさを確認しながら収集し統計処理していくことから始まるとした。

そして自らイギリスのスピリチュアルサイエンス協会SPRの会長となって、テレパシー現象などの超心理現象の蒐集につとめた。

ベルグソン亡き後 このスピリチュアルサイエンスは、予想以上の発展を遂げた。その展開を後半で紹介していきたい。

その前に科学の新たな展開をまとめておく。

3. 現代科学の到達点 宇宙物理学と量子科学

ベルグソンが亡くなった1941年 20世紀の前半までは、世界は第2次世界大戦までの相次ぐ戦争と、世界を分断した2大体制化間の冷戦に明け暮れ、戦争のための科学技術が総動員されて、原子核の知識の究極の応用として原爆を生み出した時代であった。

20世紀の後半ようやく世界に平和が訪れた時、科学は新しい時代を迎えた。

その特徴は、宇宙科学と量子物理学であった。

宇宙科学は宇宙探査によってもたらされた新しい宇宙観を打ち立てた。その主なものは

- ①宇宙はビッグバンに始まり膨張を続けている。ベルグソンのエランビタールの創生と展開論を裏付けた。
- ②宇宙世界は、人間には見えない物質ダークマター・ダークエネルギーが満ちている。

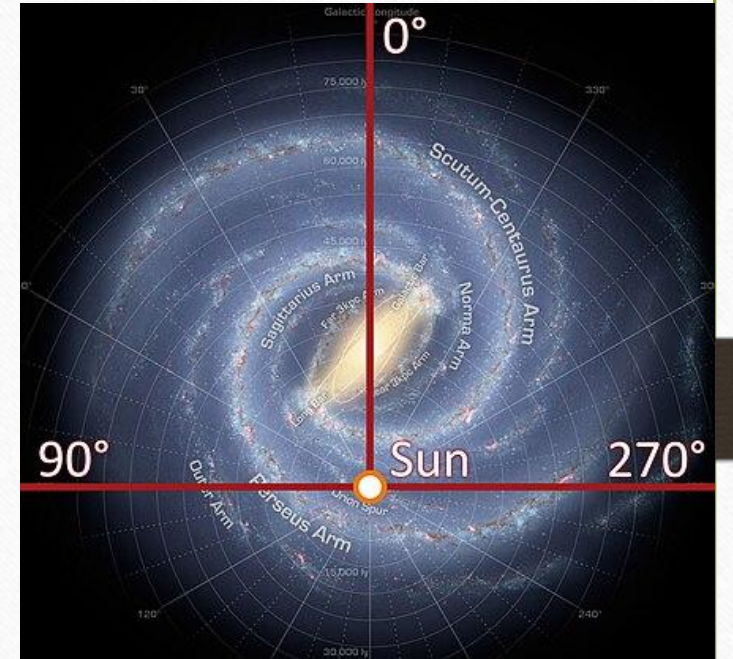
この発見で現代までの科学が魂や長期記憶の器官が発見できないので、錯覚であるとの説は力を失った。

③太陽系は銀河の中でうまれたが、そのもとの位置は宇宙線放射能が強く、いのちの誕生には不適切であった。

太陽系は、長い時間をかけて、銀河の中を外側に移動した。

•そこは生命が生まれる安全な場所であって、そこで命が生まれ、さまざまに進化をして、人間が生まれた。

その移動の現象は単純な物理法則ではあり得ないもので、**超越的な宇宙意思の存在**があって、いのちを生み出すために、動かしたとしか説明できないことである。



量子物理学そしてひも理論も新しい世界観をもたらした。

- ①量子の本質は波動であり粒子であるが、それは人間の介入観察によって決まり、客観的な物理観を否定した。
- ②量子論の究極の発展論であるひも理論から、この世界は我々が認識できる時空4次元のほかに、普通は認識できない重力の5次元軸が広がっている。

魂が5次元の存在であればこの地上から天国にそのままつながっていることを解き明かしたのだ。

③ 量子は通常原子の構成要素となるが、単体での振る舞いも存在していて、そこには特異なものがある、その一つが量子もつれであり、そのもつれた量子間の連携には光速を超えるテレポーテーションで伝わる現象がある。今一つが量子間に存在するゼロポイントフィールドの存在であり、情報の蓄積個所として注目されている。

④ ダークマターは量子として存在すると見られ、人間の魂がこのダークマター量子のもつれ集団であり、その中に長期記憶の貯蔵庫であるゼロポイントフィールドを有しているという仮説が成立しそうだ。

4. 精神科学, スピリチュアリズムの到達点

ベルグソンが活躍した19世紀の後半から20世紀の初め頃まで、欧米ではスピリチュアリズムが大流行していた。彼はその研究のために組織されたイギリスの心霊研究協会SPRに参加し、第16代の会長職についている。彼はこの研究が成功し、人類の共有知識となる時、人類は「第2の進化」を遂げるであろうと述べている。したがってそのフォローは人類の将来がかかっているのだ。

4-1、大流行の発端

それは霊界のある霊集団が、人間社会の覚醒を図る大きなプロジェクトを1840年代アメリカ東部の2か所で開始した事件である。

1 か所はニューヨーク州のポーキプシーだ。
そこに住む若い靴職人のA.J.デービスを、霊媒としての能力を仕込み、彼の口を通じて霊界の知識を授けることから始まった。

彼の口述内容は、宇宙創成に始まる当時の常識を超える科学的宇宙的知識で、驚いたまわりの人々が支援して、多数の書物となり、一躍世の注目を集めたのだ。

1848年のある朝、その彼に耳元にこれから起きる大展開が告げられたのだ。

それはニューヨーク州の北西部の小寒村ハイズビルで発生した、後に近代スピリチュアリズムの発端となった事件だ。

この寒村の小家に引っ越してきた4人家族に、ここで殺された人の霊が、叩音で語りかけてくることに、二人の姉妹マーガレットとケイトが、気がついたことから始まった。

重要なことは、この事件からこの二人の姉妹が霊界との交信ができる「**霊媒**」としての能力が発達させたことだ。

彼女たちは注目され各地から招かれその能力を披露して回った。

それをきっかけに「霊媒」能力を持つ人々が次々とあらわれ、また手法もテーブルタッピングというモールス信号通信の手段から始まり、霊が乗り移って、その国の言葉で霊界のことを伝えるようなことは次々と起きた。

それはアメリカからイギリスへそして欧州やブラジルまで拡散した。

4-2 その霊界からの語りかけの貴重な記録

身近な死者の霊との交信が出来たり、霊媒の浮遊をみたり、非日常の出来事で当時の欧米は大騒ぎをしたのだが、その喧騒とは別に静かな交霊会で、数十年にわたる霊媒の「乗り移り通信」で、人間の知らない霊界の姿や、この事件の目的や、霊界から人間へ伝え得たいことの記録がいくつか生まれた。そのうちの二つを紹介する。

その一つは「シルバーバーチのスピリチュアルメッセージ」で、イギリスの男性霊媒モーリスバーバネルの肉体を通じて1920年から60年メッセージを送り届けた。



今一つは「ホワイト・イーグルの霊示 光への道」でグレース・クック女史を霊言霊媒として1930年から50年間伝えられた記録である。

両者とも霊界の人間へのメッセージを伝えていて、その内容は、

「宇宙の大霊は人間を愛しておられる。

人間も神を愛し、互に愛し合いなさい、

人の役に立つことをしなさい。

人間は死におよんでその霊魂は霊界に行く、そこは新たな修練があり成長とともに、より光かがやく高層へと導かれる。」

霊界の姿 霊界への移行の筋道などが語られているが、異口同音である。

今一つ異色の霊媒による霊界からの伝達を自動書記の記録がある。フランス人アラン・カルデックが1856年に出した霊との対話集「霊の書」である。

この内容の特徴は生まれ変わり「輪廻転生」を説くことだ。前の2書も人間が死んで魂が霊界に入る時その魂の成長によってその後の処遇や訓練が異なることは述べているが、この「霊の書」では、人間の魂の未熟で、霊界に入るにまだふさわしくない時は、地上での生を繰り返し、地上での修練で魂の成長を促すことを述べていることだ。

実際この世では前世の記憶をもって生まれる子供もいるので、それは裏付けられるメッセージだ。

4-3 大プロジェクトの終了

1848年に始まった「第1期スピリチュアル時代」は、100年たったころ、第2次世界大戦の大混乱期に入るとともに、終わった。霊界からのアクションは急速に消える。活躍した霊媒たちもその生涯を終え、新しい霊媒は出てこなくなっている。

4-4 この大プロジェクトで人間の次なる進化は生まれたか？

この霊界のプロジェクトは、霊界の意図を人間への伝達するという点では、成功裏に終わったともいえる。

その証拠は人間たちが自主的に告白した次の証言が一例だ。
この時代のスピリチュアリストの総括がある。

ロバート・オウエンが参加し、1892年**世界的なスピリチュアリスト連合が生まれ、オウエンの筆による綱領が採択された。**
それは

- ①神は万有の祖である。
- ②人類は皆同胞である。
- ③霊魂との交流及び天使の守護がある。
- ④人間の霊魂は死後も存続する。

人間がこのような宣言を自らのものとして出したということは、ベルグソンのいう人間の第2の進化がここに芽を出したといえるのではないか。

人間はこの後、**霊界からの働きかけなし**で独自のスピリチュアリズム研究を続け、超心理学という分野を生み出し、人間とは何かという根本に迫る大きな存在全体への理解を深めて、ベルグソンが期待した第2の進化の道を確実なものとしていったのである。

4-5 霊界からの働きかけなしで進むスピリチュアリズム研究

スピリチュアル研究は、新たな方向に再出発する。霊界からの働きかけや支援がなくなっただので、そこで霊媒という特殊な人間ではなく、一般の普通の人間の霊的能力の研究開発へと転換したのだ。第2期のスピリチュアル研究で、その様子と成果を見ていきたい。

4-6 超心理学 テレパシー能力などの調査と確認

1934年アメリカのデューク大学の心理学者J.B.ラインが超感覚的知覚（ESP）という論文を発表した。超心理学の発端であった。彼はスピリチュアリズムに共鳴、人間の霊的存在性を証明する実験を一般人対象に開始したのだ。

カードの図を見ないで念力で当てる実験や、念力を集中することで投げるサイコロの目を望み通りに出すことなどに特別な才能のある人物 超感覚的知覚（ESP）の持ち主の存在が、ある確率で発見された。

またテレパシーの分野では眠っている人Aのレム睡眠時に、別の部屋から別人Bが、ある絵画を思いうかべて、念じることによって、Aの記憶に送り込ませる実験が成功している。

これに刺激されてアメリカの各大学で様々な超心理学の実験が拡大し、予知能力や透視、それに念力を合わせて人間の持つ不思議な霊力とし、その研究をサイ（PSI）研究とよぶようになった。

日本でもこのころ、超心理学で業績を上げた学者がいた。東大の福来友吉助教授（心理学）の**念写実験**である。彼はその成果を「透視と念写」という本にまとめ1931年にロンドンで出版した。その内容は透視能力のある3人の男女日本人霊媒を使って、念じた画像を写真乾板に映し出す念写写真を紹介したのである。

画像は弘法大師像など多岐にわたるが、驚くべき一枚の画像は念写の達人三田光一が1933年岐阜の公会堂で4000人の観衆の前で行った「月の裏側の風景」の念写であった。当時はそれが真実であるか誰にもわからなかったのだが、36年後1969-72年NASAの月面探査機が、撮影に成功した裏月面の写真とほとんど一致していることが判明したのである。

そのようなことが可能になるには、念写した人三田氏の魂が宇宙に飛び、瞬間移動で月の裏を見てきたと推定する以外ない。

現代でこそ生前の魂の離脱という技術も生まれているが、当時はそのような事実を知る人もなく、月の裏の写真といっても根拠のない想像の作品としか受けとめられなかった。

それが約40年後になって宇宙開発の技術によって、その写真の正確さが証明されるとは、ただただ驚くべき事件であった。

この事件のあった1933年まで生きていた宮沢賢治も、魂の生前離脱の能力を生まれつき持っていたようである。

彼の作品「銀河鉄道の夜」「インドラの網」はその魂の宇宙への離脱が生み出した稀有の文学である。

「銀河鉄道の夜」の中で、はるか遠くで、イエスキリストが大集団の魂を率いている風景を描いているが、それは先に述べた「シルバークーチのスピリチュアルメッセージ」や「ホワイト・イーグルの霊示 光への道」で同じ風景の証言がある。賢治はそれを霊界宇宙でみて、「銀河鉄道の夜」の風景のひとつとして描いたのだと想像する。

4-7 臨死体験の調査集大成

超心理学の手法の「事例採集と統計処理」で新たな分野が生まれた。「**臨死体験**」である。1975年ヴァージニア大学のレイモンド・ムーディ教授が医学部で起きた事例を集めて「かいま見た死後の世界」なる本を出版した。

この本の反響は大きく、それに反応してギャラップ世論調査が行われ、臨死体験をした人間の存在は3%以上いること、そしてその体験内容も魂の離脱、安らぎ光体験と、自己の身体の観察など、共通性が高いと報告した。

日本でも著名なジャーナリストの立花隆氏が書いた「臨死体験」は、出版後大反響を呼び、1991年にはNHKの大型ドキュメンタリー番組で放映され、2千万人の視聴者がそれをみた。

ここに死後、魂の肉体からの独立飛翔というスピリチュアル現象が特別な能力を持った霊媒によってだけ起きるのではなく、人間誰にでも死とともに共通する体験であるとの確信が広まっていった。

4-8 生前の魂の体外離脱

超心理学での極め付きの成果が生まれた。

人間の生前での魂の身体からの離脱実験である。

アメリカの超心理学者ロバート・A・モンロー（1915-1995）は、自身に偶然起きた自分自身の魂の体外離脱の体験をしてから、その実態を極めるべく研究を開始し、1971年にはバージニアにそれ専門のモンロー研究所を設立し、体外離脱体験への協力者を募集しながらその発生条件を研究した。

肉体は睡眠しながら、意識はあるという明晰夢という特殊な状態を目指し、左右の脳に別の周波数の音を聞かせるヘミシングという独自の技術を生み出して、明晰夢に続いて、魂の肉体からの離脱がある確率で起きることを実証した。

彼の著作「魂の対外旅行」によればアメリカ人の25%はこの経験をしていると知っている。

それは先にあげた念写の三田氏や「銀河鉄道の夜」を書いた宮沢賢治の例のように、生きている間の靈魂の体外離脱が、その人持って生まれた特別な能力で起きていることがあるが、それがそれほどまれなケースではないことを言っている。

モンローはそれを科学的な手段で人工的に発生させることに成功したのだ。

5, 人類の次なる進化 50%の限界と今後の展望

5-1 ベルグソンの期待のスピリチュアル研究の成果

第1次のスピリチュアル事件で、人間はその潜在能力の大きさを知り、その生涯の終わりに訪れる幸せな魂の飛翔の新たな生の始まりと、その役割を理解し、さらに第2次の超心理学の進展で確信を深めた人間は、ベルグソンのいう新たな進化のスタートをきったのである。

それは人間にとっての最大の死の苦悩からの脱却、その存在の偉大さを感じる幸福の訪れであった。

しかしそのスタートラインに立っているのは、世界の人口の50%以下である。ある調査がある。

スピリチュアリスト綱領によれば

- ①神は万有の祖である。
- ②人類は皆同胞である。
- ③霊魂との交流及び天使の守護がある。
- ④人間の霊魂は死後も存続する。

それをすべて受け入れるスピリチュアリストは1%に満たないであろうが、そのうちの④死後の霊魂の存続を信じる人の割合を調べた調査がある

Pew Research Center 「死後の生命を信じるか」調査（2017年ごろ）

国・地域	「死後の生命を信じる」と答えた人の割合	コメント
アメリカ	約72%	キリスト教圏で、霊や魂の存続への関心が高い。
イギリス	約45%	スピリチュアリズム発祥地の一つ。 今でも教会が存在する。
日本	約30～40%（霊の存在を信じる）	特定宗教ではなく、死後世界や祖霊信仰が文化的に根強い。
ブラジル	約80%	心霊主義（スピリチズム）という形で広く信じられている。
フィリピン	約85%	カトリックと民間信仰が融合し霊魂や死後の信念が強い。

5-2 今後の展望

この調査の示すように、日本人の3～40%は霊的世界を信じているが、それは縄文文化以来の伝統で、自然に神的崇敬を抱き、伝統芸能である「能」の演目が、霊界との交流を描き、それを自然のことと受けとめている文化的伝統があり、霊の世界の存在には慣れ親しんでいることが示されているが、自然発生的であり、それは人類の第2の進化に結びつくような人生を変えるような確信的ものではない。

欧米を席卷した第1のスピリチュアルブームの時代、日本でもあるブームがあった。神のお告げがある人間に降って来たということから始まる新宗教があちこちで生まれたのがその証である。福井の大本教であり、奈良の天理教 岡山の黒住教などである。

当時日本は天皇制軍国主義への道が席卷していたので、大きくなると弾圧されてしまった。

第2のスピリチュアル研究は、日本では始まっていない。敗戦から戦後の経済復興という流れの中で、世俗的な生き方を迫られたため関心が向けられなかった。

「現代科学」がダークマターダークエネルギーの研究がすすみ、
霊魂がの姿が、科学的にも明らかになったとき、その時日本人に
も 新たな進化が訪れることだろう。

それはあと100年かかるかもしれない。

「そのキャリアである肉体の元で成熟した魂は、
肉体の生涯を終えた時、

喜びとともに、無限の愛に満たされた宇宙意思の元へ、
飛び立っていき、その意志の完成作業に参加する。」

との確信がすべての人に共有された時、ベルグソンの予想通り
人間は次なる進化を遂げると期待できる。